



独立行政法人 国立病院機構

四国子どもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト



—今月のショット—

隣接する養護学校との
外壁画制作

2016年 9月号

—院内の小さな声から—

壁画が完成した時、織田校長先生から生徒にお話がありました。小雨の中、壁画が無事に完成したことをねぎらってくださった後、「今日、君たちが描いた『あさぎまだら』という蝶のことを知っていますか？」織田先生は理科がご専門でいつもとてもおもしろい話をしてくださるのです。生徒達が息をのんで聞いていると先生は「あさぎまだらはね。この辺りだつるぎ山とか高い山の上で夏を過ごして、冬には2000kmもの距離を飛んで台湾まで行くんですよ。でもね。2000kmもずっと自分で羽ばたく訳じゃありません。気流に乗るんです。ある高さまで飛んだら気流に乗るの。皆さんも自分なりに頑張っていれば、いろんな人が助けてくれます。無理しないで自分にできることを精一杯してください。そして、後は気流に乗ってください。」

壁画のあさぎまだらが大きく深呼吸したように見えました。

—海を渡る蝶 2016—

善通寺養護学校との共同壁画制作「海を渡る蝶」も今年で2年目です。昨年はいったい何をしようとしているのか、本当に生徒達に描けるのか。手探りの状態でスタートしたプロジェクトでしたが、昨年の経験と成功のお陰で、今年は養護学校の先生方とも感覚が共有でき、順調に準備が進みました。昨年は車椅子の生徒さんに無理がかからないようにと、敢えてペイントとは別にモザイク制作を準備していましたが支援されている先生から、彼にも他の生徒と同じようにローラーで壁に描かせて欲しい。と要望があり、急遽参加してもらうことになりました。準備に手間がかかっても、少し、無理することになっても、皆で同じ作業をすることに大きな意味があるのだと気付かされた出来事でした。今年は技術教育担当の脇先生が、はじめから車椅子の生徒も参加できるようにと、ローラーに長い柄をつけ、絵を車椅子に取り付ける器具を用意してくれました。そうすることで生徒は電動車椅子を前後するだけでローラーは動き、壁に色が塗れるという仕組みです(写真)毎年のごとくですが、一緒に作業をすると学生同士のさりげない思いやりに感動します。ある男の子がローラーにペンキをつけて壁に色を塗っていたのですが、一回塗るたびに床に置いた紙皿まで歩いて行って、塗料をつけてまた同じ場所に戻ります。私が(どうして紙皿を持たないのかな?)と不思議に思った瞬間、隣にいた生徒がずっと紙皿を持って彼の隣に立ちました。彼はちょっと微笑んでお辞儀をしてその紙皿の上にローラーを置きました。彼は片腕が不自由だったのです。紙皿を持った生徒は遠くの生徒に向かって何か冗談を言って笑っています。自分が彼をサポートしていることなど気にも留めていないかのように。軽やかで美しい光景でした。



今月の一枚

作家名: 武内 ヒロクニ
作品名: 四つの太陽キミとボク

「子供」と呼ばれて来たことへの大きな主題です。広く考へました。作品を創った後に大きな主題になりました。展示企画者に対しても、大きな希望とそのユニークな考にも敬意を持ちます。病院そのものが、輝いています。「子供」は子供でなく、大きな主題です。フロイドやアンドレブルトン生涯の思考の進め方にも、似て拮がりを、もっています。この制作の後で、私は、「子供・大人」が無くなり、全てのジャンルに拮がりを持しました。大きい重要な一歩を、香川小児病院は、打ちあげました。